

## 復曲能〈樞天狗〉の演出について

田村良平\* (村上 湛)

去る平成二十五年（二〇一三年）二月二十三日、大阪・大槻能楽堂に

おける第五四六回大槻能楽堂自主公演「日本探訪〜日本の歩んだ道・日本人の想い」で、長く上演を絶っていた能〈樞天狗〉の復興演出を担当した。約一ヶ月これに先立ち横浜能楽堂で上演した観世小次郎信光作の能〈巴園〉復曲（本紀要前年分に報告掲載）と並び能の上演史上希少な試みであるので、本項では、これまで公表する機会がなかった当上演時の型の記録を中心とした報告を試みたい。

なお、この〈樞天狗〉については、上演当日に会場配付のパンフレット、および『能楽タイムズ』平成二十五年四月号（能楽書林・同年四月一日発行）に「復曲〈樞天狗〉について」と題する報告文を執筆、掲載した。本稿の前半、報告部分は後者の文章に拠ったところが多いこととお断りしておく。

音阿弥ゆかりの能とされ（「紩河原勧進猿楽日記」記載、寛正五年）

一四六四年四月十日・第三日目の演目〈樞原〉に比定）、その後は上演途絶。観世元章の明和改正本に採録されたものの、再び顧みられず現行曲化もされなかったこの番外曲は、すでに平成六年「能劇の座」で復曲され、再演も試みられている。

その折に同時復曲された能〈松山天狗〉が（明治以降に現行曲化した金剛流とはまったく別箇に）、以後、観世流の役者たちの手で頻繁に試演されているのと異なり、優美な舞事もなく、後述するとおり舞台面もきわめて陰惨な〈樞天狗〉は復曲されたものの積極的には再検証されず、放置されてきた。この能に「天狗物としての新たな可能性」を改めて見て取った大槻文藏氏の委嘱で、今回は「能劇の座」版とは無関係に、新たに演出を作り上げた。私は復興初演の舞台も見、その時の記録も再見したものの、基本的にそれらは参考にしていない。

以下、はじめに三点ほど、今回の演出の主要な意図を記しておきたい。

第一。今回は後場で六条御息所ニ郁芳門院を責め苛む小天狗役を狂言方が勤め（「能劇の座」代表の演出家・堂本正樹氏の発案と聞く）、民俗芸能で用いるピンザサラを鳴らして田楽風（郁芳門院は田楽好きだったという）の演出を試みたが、そこに生ずる滑稽な軽薄さを忌んで、私は今回これを踏まなかった。

というのも、この能の後場に登場するシテ・大天狗（今回は前後に出る郁芳門院ともども両シテとした）は「愛宕山に住む太郎坊天狗」だが、これは弘法大師の高弟たる柿本しんぺん紀僧正しんせい眞濟の転生と伝えられる。『拾遺往生傳』巻下ほかによると、この眞濟は天狗となって文徳天皇妃・染殿后明子を悩ませた末、不動明王の啓示を受けた比叡山の名僧・相応によって調伏されている。

さらに、これと別の伝説がある。『今昔物語集』巻第二十「染殿后爲天宮被燒亂語第七」に名高く、慈尊院栄海の『真言伝』にも三善清行の逸書『善家秘記』から類話を引く。死して紺青鬼こんじょうきとなって貴婦人と交わる淫慾を遂げた（柿本紀僧正眞濟とは無縁の）「金剛山の某聖人」の、凄惨な救いのない逸話である。

この別々二つの「天狗」伝説、さらに「柿本紀僧正眞濟」と「金剛山の某聖人」は、興味本位の末にか、いつしか混同された。狂言（枕物狂）に「又かきのもとときそうじやうは、そめどのゞきさきをこひかねて、かものみたらし川に身をなげ、あをきおにとなつてそのほんまうをとげらるゝ」（『大蔵虎明本狂言集』）と言及され、一曲のテーマをなしているのがその一例である。つまり「才色抜群の至高の皇女が天狗に魅入られ、理不尽な呵責に苦しみ続ける」不条理とも何とも言いがたい陰鬱なこの能の劇設定の背景には、説話史における「眞濟＝愛宕山に住む太郎坊天狗」の複雑な性格が潜んでいるわけである。

以上の点から、能の表現としての露悪主義は厳禁としても、一曲のテーマたる「天狗とそれに魅入られた女人の救いのない業」を正面から描き出すため、狂言方の演技から必然的に生ずる軽さと滑稽さは避けたかった。これが私の演出プランの第一である。

第二。後場で熱鉄の苦を受けた郁芳門院が黒焦げとなるが、天狗が撫でると瞬時に甦って永遠にその反復に悩まなくてはならない、そのさまを演技と型によって視覚的に具現化したかった（「能劇の座」上演版では試みられていない）。これは後述のとおり（『葵上』）の応用によって所期の成果を挙げ得たかと思う。

第三。間狂言・木の葉天狗の「立ちシャベリ」の改訂。「能劇の座」復曲時に大きな力となり、「この能の六条御息所」（とは『源氏物語』

のそれではなく）＝白河院女一宮・郁芳門院媞子内親王」という人物設定をはじめて解明したのは沢井耐三氏の論文だった（『愛知大学国文学』第三二号所収「謡曲『檣天狗』の原話」も一人の六条御息所・郁芳門院）。この沢井氏による発見、すなわち主人公の素姓をハッキリ示すため、ほとんど新作の文句を書いた。長大にわたるのを避け、この間狂言で眞濟の逸話については触れなかったけれども、その点については少し残念ではあった。今後再演の機会があれば加筆したいと思う。

以下、当日の舞台展開を略記する。なお、詞章は原則として「能劇の座」版に基づき（諸伝本間に特に際立つ異文はない）、随所改訂した。

前場は《次第》の囃子でワキ・熊野の山伏が出る。続いて《一聲》の囃子で雪笠に腰巻・壺折、杖を突き手籠を持った花摘みの前シテ・里女が出る。面は小面。位取りも含めて（葛城 大和舞）の雰囲気。ちなみに古語で「花摘み」とは「檣摘み」という意味（そもそも雪中に花は咲かない）。色なき厳寒の白銀世界を想起したい。

古本では中入前にただ「われは六条御息所なるが」とのみ名のり、それが長らく「シテの正体＝『源氏物語』の女君」と誤解される原因となつた（もっとも、同一人物ではないにせよ、あえてシテの実名を示さずに『源氏物語』のイメージを漂わせ、妄執に悩む孤高の王朝物語の貴婦人像を間接的に援用しようとした作意は、それが成功しているかどうかは別として、認められると思う）。今回は補筆して、前シテにハッキリ「われこそ郁芳門院媞子内親王」と告白させた。ちなみに、「六条御息所」の名称は古本どおり中入の地謡「上歌」にあり（今回は「六条の御息所」と『も』言はれしが）と「も」一字を補入）、媞子が白河院女一宮

だということは間狂言の「立ちシャベリ」に書き加えた。ちなみに、原作の「上歌」後半「夕日かげろふ」以下を「能劇の座」では別に分けて「下歌」に仕立て直し音調も変えているが、これには無理がある。今回は古本どおり通してスラスラ謡う「上歌」に復した。

前シテは《来序》で中入。続いて小天狗出立の間狂言・木の葉天狗が出、既述の内容で「立ちシャベリ」をし、帰る。後見が車の作り物（熊野）と同様の紅入）を舞台中央に出す。

太鼓打ち出して《下ガリ端》。一段取って幕上げ、後シテ・大天狗が出て幕離れ、幕内に向けて二つ大きく両ユウケンすると、ツレ・小天狗甲、後シテ・御息所、ツレ・小天狗乙、の順で舞台に出、御息所は車の中央に立ち小天狗が左右を挟み、大天狗が常座で床几に掛かる。「渡り拍子」の地謡トメで軛を踏み越え車の前から出た御息所が正先に佇立すると囃子をいったん打ち止める（作り物も引く）。大天狗と御息所の問答の末、苦患の場となると、小天狗二人が詰め寄って熱鉄を強いる演技。御息所は交差した手を胸に当てて下に居て耐え忍ぶ態。続いて大天狗が立ち上がり、「はや飲めとこそ」と謡うと改めて囃子打ち出し（こそ）に太鼓カシラ）、二段の《立廻り》。これは狂言の十王物に定番の《責メ》を能に移入したもので、トメには再び大天狗が「はや飲めとこそ」と謡い込む。御息所は両袖に手を入れ（葵上）と同じ手順で唐織（熨火を連想させる黒紅色）を引きかづき舞台中央に安坐、「かたちも今は消え消えと炭竈の熨火となり給ふ」さまを示した。

続いて小天狗が御息所を囲むところでは終息感を思わせる《打切》ではなくテンポ軽快につなぐ《今合返》を用いた。よって謡い返しは「小天狗立ち寄りて。《今合返》ニクサリ）立ち寄りて」となる。小天狗によって唐織を剥がれた御息所はモギドウのまま呆然と上体を起こし蘇生

の心。大天狗が床几を立ち、御息所に立ち寄りて打杖で打ちながら徹底して残酷な責めを尽くす態。大天狗と小天狗の三人は御息所をあざ笑いながら幕に入る。

一人残った六条御息所。地謡の作曲も今回は変えて、観世流（俊成忠度）キリのように末尾「ありつる愛宕の櫓が原に」から弱吟で余情を効かせる。ジックリと返シを謡い「夢まぼろしとなりにけり。夢まぼろしとぞなりにける」で瘦女、白地摺箔に緋大口モギドウの御息所は一ノ松で枕扇、下に居てトメた。

全曲で七〇分程度。こなればもっと短くなるだろう。

はじめに述べたとおり決して心地よいテーマではない。教養と美貌を誇る「六条御息所」のちょっととした驕慢がもたらした悲劇であるとはいえ、御息所に罰を与えるのは善の立場に立つ神仏ではなく、邪悪な天狗である。つまり、この能は絶望のうちに終わり、それが永劫に反復されることを暗示する虚無のドラマである。世阿弥も禅竹も、こうした作品は一切、制作していない。

したがって、この《櫓天狗》に価値があるとすれば、「残酷かつ不条理な救いのなさ」に人の世の運命を覗き、肯定したくない人間の「業」を見つめる、一種の哲理にあるだろう。

演技・演出に濃密な処理が続いたので、大槻氏をはじめ出演者各位にも通ずるこの能の面白さが少しでも見所に通ずれば演出担当者としてまことに嬉しく思う。

現在のところ一度限りの上演に留まっているので、今後また折を得て、改訂・再演の機会が得られたら喜ばしいことである。

平成二十五年二月二十三日（土）午後二時開演

第五四六回大槻能楽堂自主公演「日本探訪〜日本の歩んだ道・日本人の想い」

復曲能〈密天狗〉

後シテ（大天狗） 大槻文藏

前シテ（里女）／後シテ（六条御息所） 多久島利之

後ツレ（小天狗） 山本博通・梅若猶義

ワキ（熊野の山伏） 福王知登

アイ（木の葉天狗） 丸石やすし

笛・左鴻雅義／小鼓・久田舜一郎／大鼓・守家由訓／太鼓・三島元太郎

地謡 赤松禎英（地頭）・上田拓司・寺澤幸祐・武富康之・長山桂

三・水田雄昭・山田薫・赤松裕一

後見 上野雄三・山本正人・生一知哉

演出・再構成 村上湛

※当日は上演に先立ち「魔道とは何か？ 人間の驕りと弱み、実在の御息所にみる」と題する講演を村上自身が担当した。

### 【留意点】

1 この上演本は基本的に平成六年「能劇の座」公演上演版に拠るが、詞章等、細部に変更を加えた。間狂言「立ちシヤベリ」は全面的に書

き換え、全体の演出はまったくの新案である。

2 この能の見どころは、天狗物の能に共通し潜在する暴力性にある。

さらに言えば、シテに当たたる愛宕山太郎坊天狗の前身は淫蕩な説話に彩られ狂言〈枕物狂〉に引かれる柿本紀僧正眞濟であり、その太郎坊天狗が高貴なる美女を苦悶させる被虐性・嗜虐性が作意であろう。それだけに、露悪的に野卑な表現にならぬよう注意を要する。

3 前場に言う「花摘み」とは、〈大原御幸〉でもそうであるように、そもその語義として「草花を摘む」のではなく「密を手折る」行為である（花〓密の枝）。したがって、花籠に色花を盛る誤解はなきようでありたい。

※ 元来、雪椿など少数の例外を除き雪中に花は咲かない。前場「上歌」に言う「末摘花」は夕日の色調の比喩、同じく「春もまた來なば」は來たるべき春の仮定である。いずれにせよ当季は花や若菜は影も形もない、一面が白雪の荒涼たる嚴寒である。

4 今回は「能劇の座」版と異なり、前後場の六条御息所、後場の大天狗、ともにシテ（両シテ）とした。

5 「能劇の座」版では間狂言二人によって演じられた小天狗を、今回はツレ二人の役とした。狂言方が絡むことによって舞台に滑稽感が生じ、六条御息所の役柄が軽薄に見える弊を避けるためと、シテ方の演技で御息所を責めたほうが重みと陰惨さが増すためである。

6 詞章中の用字はすべて正字・正仮名によったが、読みがなは新かなぎかいで示した。

7 ルビを付したうち、「つ」音については、促音の場合はカタカナ小字「ッ」、いわゆる「呑む音」の場合は漢字一字「含」で示した。

【扮装と装束】

◆シテ（後場・大天狗）／大悪尉の類。白頭。白大兜巾。無紅厚板。白地拾狩衣。半切（白地がよし）。鈴掛。掛絡。羽團扇。無紅打杖。カセ杖（紺緞で巻く）。

◆前シテ（里女じつは郁芳門院六條御息所の靈）／増または若女・小面。十寸髪にも。鬘。摺箔。紅入腰巻。白綾または縫箔壺折。雪笠。杖。手籠（青葉入）。紅入鬘扇（懐中）。

◆後シテ（六條御息所の靈）／泥眼または靈女・瘦女。十寸髪にも。鬘。白地摺箔。緋大口（浅黄・鬱金にも）。黒紅地唐織（白地縫箔・白地摺箔・白綾にも）壺折。無紅鬘扇。

◆後ツレ（小天狗・二人）／大ベシミ。赤頭。黒大兜巾。厚板。拾狩衣。半切。羽團扇。

◆ワキ（三熊野の山伏）／山伏出立。

◆アイ（木の葉天狗）／小天狗出立。

作り物

◆車（破れ車にはせず常の車。装束付けにもよるが、常の紅緞、または変えて紺緞で巻いても、どちらでも良い。かえって紅緞のほうが効果的か）

【詞章と演出】

【ワキの出から脇座に居着くまで、すべて山伏ワキの定型に準ずる。位取りは〈葛城〉を想定】

《次第》

【次第】

ワキ 櫓が原の道分けて。櫓が原の道分けて愛宕の山に参らん。

【名ノリ】

ワキ これは本山三熊野の山伏にて候。われいまだ愛宕山櫓が原に分け入らず候ふほどに。たゞ今思ひ立ちて候。

【上歌】

ワキ 西山や嵯峨野の嵐音寒き。《打切》嵯峨野の嵐音寒き。雲を重ねて小倉山清瀧川を過ぎ行けば。《打切》その名も高き愛宕山。櫓が原に。着きにけり櫓が原に着きにけり。

【着キゼリフ】

ワキ あら笑止や。俄かに雪降り來たりて候。しばらくこれなる木蔭に立ち寄り。雪を晴らさばやと存じ候。

《一聲》

【二セイ】

【右手に杖突き左手に籠を提げた前シテは〈葛城 大和舞〉の格調を想定。一ノ松で「二セイ」を謡う】

シテ 愛宕山。櫓が原の雪のうちに。花摘み添ふる。袂かな。

【サン】

【幾生の善を喜ばん】で正面に一足ツメル】

シテ 寒林に骨を摧き。靈鬼泣く泣く前生の業を憾む。鹿野に花を供ずる天人。返す返すも幾生の善を喜ばん。

【四】

シテ いつもの如く山に入り。櫓を手折らばやと思ひ候。

【いつもの如く】で一足引き、「手折らばやと思ひ候」と言い終えてからアユミ、「男女の上下によるべきか」あたりで常座に立ち、ワキを向



く

〔問答〕

ワキ あら不思議や。われら如きの行人だにも。ものすさまじき愛宕山に。しかも女性の御身として。花摘み給ふは不審なり。

シテ それ後の世を歎く志。男女上下によるべきか。佛の爲の花なれば。山に入り櫛を手折る事。何の不審に候ふべき。

〔いや〕でシテは正面を向く

ワキ いや櫛を手折り給ふに不審はなけれども。そのさま女御更衣とも申すべき氣高き女性の。御供の人をも伴ひ給はで。この山中にたゞ一人ましますは。思ひ寄らざる御事なり。

〔恥づかしや〕でシテはワキに向き、「これにつきても」で正面に直し、

〔人は愛宕の〕でワキに向き、「嶺にや住むらん」で一足ツメル

シテ 恥づかしやなどわれを貴人とおぼすぞや。これにつきても昔の人は。よくも心を述べにけり。なき名のみ高雄の山と言ひ立つる。人は愛宕の嶺にや住むらん。

〔下歌〕

〔この歌の如くに〕でシテは正面を向き「人がましくも」から六足へ出「わがためは」で足でヒラキ、「愛宕の山伏よ」でワキに向き「知らぬことなのたまひそ」で一足ツメ、《打切》で足戻し正面に向く

地謡 この歌の如くに。人がましくも言ひ立つる人ぞなかなかわがためは。愛宕の山伏よ知らぬことなのたまひそ。《打切》

※「能劇の座」版では、次の《上歌》のうち「夕日かげらふ」以下を《下歌》として分けたが、必然性に乏しく不自然なので、今回は古本どおり「野邊の若菜摘むべし」まで全体を《上歌》とする（節付・手付ともに改訂の必要あり）。地謡は位重くなり過ぎぬよう、

余計な思い入れをせずサラサラと謡う。

〔上歌〕

〔初句〕言はじや聞かじ白雪の「アトの《打切》を聴いて正面へ六足ほど出、「白妙の」で改めて正面に一足ツメつつ右袖を見て左に軽く杖を突き、「花を」で正面にツメ「摘まうよ」でヒラク。左にトリ「夕日」で脇正面へ出つつ幕の方を向き遠望の心でジツと立ち、「春も」で氣を変えて右にトリ正中へ行き、地謡トメでワキに向いたまま下居、杖と籠を置き笠を脱ぎ、懐中の扇を取り出して持つ

地謡 何ごととも。言はじや聞かじ白雪の。《打切》言はじや聞かじ白雪の。道行ぶりの薄衣。白妙の袖なれや櫛が原に降る雪の。花をいざや摘まうよ。夕日かげらるふ紅の。末摘花はこれかや。春もまた來なば都には。野邊の若菜摘むべしや。野邊の若菜摘むべし。

※次の「問答」のうちワキ「たゞ一人」は「ただイチニン」ではなく「ただヒトリ」と読むことにする（語感の寂しさを意図）。シテ「今は何をか包むべき」のあと、「能劇の座」版は「我は白河院の息女。六条の御息所なるが」だが、今回は「われこそ郁芳門院姫子内親王」と改めた（皇女を「息女」と称するのは違和）。院号と実名を出し、能（定家）の趣を漂わす意図もある。

〔問答〕

〔後見は花籠・笠・杖を引き、そのあとシテは下居のまま正面に向く〕ワキ 不思議やな夜に入りて。なほこの山中にたゞ一人。花摘み給ふはなどやらん。いかさま化生の人なるべし。御名を名のり給ふべし。

〔シテは「今は何をか」と言いつつ下居のままワキに向く。そのまま暫く不動、「二つの心の」でフシになってから少しくモリつつ正面に向く〕シテ 今は何をか包むべき。われこそ郁芳門院姫子内親王。われ一天の

國母として。美女の譽れ慢心となり。また一乗の妙經を片時も忘ることなければ。これまたかへつて慢心となり。二つの心の障りゆゑ。魔道に墮ちて天狗に取られ。この愛宕山を住處とせり。

※次の《上歌》は古本も「能劇の座」版も最初から地謡だが、今回は初句のみシテ謡に改め凄みを出す効果を狙った。また、今回は原文「御息所と言はれしが」に「も」一字を補って謡い易くし「御息所とも言はれしを」と改めた。なお、「能劇の座」版で末尾「魔道の苦患」の反復部分を「御覽ぜよ御覽ぜよ」と続けたが、これはいかにも不自然と思われるので、今回は「魔道の苦患御覽ぜよ」(一) 魔道の苦患御覽ぜよ」と変え、節付・手付も改めた。

### 「上歌」

「シテ謡」すはまた時も來たるはは、それまでの空気を一転させるように凄みを効かせる。以下、「魔道の苦患御覽ぜよ」まで地謡は力カラず、全体をジツクリと謡い留める。「山の波」でシテは立ち、正先まで出て「御息所とも言はれしが」でヒラキ、右にトリ、脇正面から「魔道の苦患」(初句)でワキに向き正中まで出、大きくヒラキ、「魔道の苦患」の返シ句で右にトリ常座に行き掛け、「御覽ぜよ」で左、右、左と足を遣い、地謡トメで静止

シテ すはまた時も來たるは。《打切》

地謡 すはまた時も來たるは。雲の波山の波の。立ち來るよそほひ。愛宕の山の天狗に。取られて失せし六條の。御息所とも言はれしが。身は安からぬ。魔道の苦患御覽ぜよ。魔道の苦患御覽ぜよ。

### 《來序》

「シテは内親王・前斎宮・中宮・女院の位取り充分に《來序》を踏み込み入。続いて《狂言來序》に転じ、アイ出て常座に立ち、定型のとおりに

「立ちシヤベリ」あり(「御鍾愛Ⅱゴシヨオアイ」と「御寵愛Ⅱゴチヨオアイ」とは語義も発音も異なるので注意)。停滞なく速めにサラサラと語る)

### 「立ちシヤベリ」

アイ かやうに候ふ者は。愛宕山楢が原に住まひする木の葉天狗にて候。たゞ今これへ罷り出づること餘の儀にあらざ。人皇七十二代。白河の院の女一宮。郁芳門院媿子内親王と申し、御方。父帝母后の御鍾愛なめならず。はじめは伊勢の齋宮にそはり給ひしを。七十三代堀河の院御在位の御時。御姉宮なればとて。忝くも中宮の御位に進ませ給ふ。すなはち國母と仰ぎ。御息所と申し奉り。都六條西洞院を宮處と定め。奏でつ舞うつ管絃のもてあそび絶えせず。ことには田樂をば好ませ給ひたるげに候。容顏美麗。美人の譽れもつばらにして。道心堅固、持經第一。法華の八軸を片時も放ち給はざりしかども。あるとき看經に御暇ありける折節。傍らなる御鏡にわが御かたちの御映りたりしを。つくづくとご覽じおはしし。御息所ひそかにおぼしめさるゝやう。げにげにみづからほどの美女。かほどの清淨。法身はまたもあるまじいなんと。何心もなく驕慢の態におぼえさせ給ふところに。なんばう不思議なる御事にて候ひつるぞ。玉の机にうち置かせ給へる金泥の御經にはかに消え失せ。すなはち病の床に就かせ給ふとそま。嘉保三年八月七日。御年二十一歳にて崩御あらせらる。わが頼うだる大天狗殿。さいつころ御息所のたまさか慢ぜさせ給ふを憎しとあつて。御經を奪い取り御命を縮め奉り。御息所の魂魄たちまじ魔道に引き墮とし。熱湯鐵丸さまさまの御苦しみにて候。げにもげにも御いたはしき御ことかな。われら如きの存ずるは。いかに慢心あればとて。月にも花にもかほど美しき御方を。熱鐵は無用にして。甘いにも參らせ。大天狗殿も少しく御寵愛あれ

かしと存ずることにて候。いや。何かと申すうちに時刻が移る。まづまづ仰せ付けられたる如くに申し付けばやと存ずる。皆々承り候へ。今日は御息所を伴ひ奉り。六條の古宮へ御出であつて。魔道の御遊敷を盡くさせ給ふべき由承り候。女院行啓の御供には。天狗の面々残らず罷り出で。物見車の供奉し奉れとの御事なり。かまへてその分心得候へ。心得候へ。

《下ガリ端》

※「渡り拍子」の天狗と地謡の語い分け等、適宜改変を加えた。

「能劇の座」版に比して差が多い。

「後見は車の作り物を持ち出し舞台正中に据える。段取り、太鼓高キザミで幕上げ。まず大天狗出て三ノ松で幕離レ。気を変え幕内に向き（この間、幕は下ろさず上げたまま）大きく両ユウケン二つ。大天狗向き直り先に立ち、続けて小天狗甲、御息所、小天狗乙の順で出る。御息所クモリ加減で、基本的に能の最後まで「瘦女ノ足」を遣い続ける。大天狗は横板に入るといったん後見座に立ったままクツロギ、後見に羽団扇を腰に挿させ、カセ杖を渡される間、小天狗甲以下は舞台に入り車の向かつて右横、御息所は車の中、小天狗乙は車の向かつて左横にそれぞれ立つ。三人キチンと立つと大天狗は後見座で正面を向き（ここで太鼓高キザミ）、そのままカセ杖を突きつつ出て常座に立ち《下ガリ端》打ち止める加減」

「渡り拍子」

地謡 見渡せば。見渡せば。四方の空も晴れやかに。飛び行くや雲車の巡る空もや面白やな。巡る空も面白や。【大天狗は右ウケル】

小天狗 名にし負ふ。

地謡 名にし負ふ。【大天狗、正に直すと後見は床几を持ち出し大天狗

腰掛ける（あとで作り物を引くのに邪魔にならぬ位置）。小天狗サシ分ケ「愛宕の山の太郎坊。平野の獄の次郎坊。名高き比叡の大獄。【小天狗、正面に過ぎざま高く胸ザシ、ツメ」横川の杉叢。【そのまま下をサシ、ヒラク】比良の湊の流松の。嵐も立ち歸り歸りて。【小天狗、御息所に向く】こゝは花の都の。六條の院と申すも。【向かつて右の小天狗は退り地謡前に立ち、向かつて左の小天狗は作り物の後ろを回り地謡前に立ち、御息所は正面に出て軛を踏み越え正先に立つと後見が作り物を引く。大天狗は床几のまま御息所に向く】御身の故郷なるものをこゝに車を立て置いて暫しは休み給へや暫しは休み給へや。【この「渡り拍子」のトメで囃子を止め、以下しばらく謡のみ】

「サシ」

「御息所は正先でクモつたまま不動」

御息所 恨めしのわが身やな。いかなる罪の報ひにか。かゝる魔道にをちこちの。山路にいつまで迷ふべき。

「掛ケ合イ」

大天狗 いかにか六條の御息所。何をか歎かせ給ふらん。御身より出づる慢心なれば。心からは知り給はずや。はやはや狂ひ給へとよ。

「御息所は正先でクモつたまま「またその時の」でタラタラと正中まで退る」

御息所 悲しや悲しや狂へとは。またその時の來たれるか。

「小天狗二人「一日三度」で御息所に向かい（御息所の向かつて右側

並んで）ズカズカと出る」

小天狗 今に始めぬ御苦しび。一日三度の餌食とて。熱鐵の金湯熱鐵の丸かせ。

「天狗二人、「熱鐵の金湯」で左袖返し、右手の羽団扇で二回汲み注ぐ型。

丸かせ。

「天狗二人、「熱鐵の金湯」で左袖返し、右手の羽団扇で二回汲み注ぐ型。



「御息所、苦患に身を縮めるようにガタリと下に居る」

御息所 服せんとすれば炎となつて。

「大天狗立ち（後見は床几を引く）、御息所へキツと左袖を返し（右手にカセ杖突いたまま）、「はや●飲めとこそ」の●に当て杖一つ強く突くと、御息所は両手で胸を抱き上半身深くクモル」

大天狗 何とて飲まぬぞはや飲めとこそ。

《立廻り》

※「能劇の座」版にない太鼓入り《立廻り》挿入。あとで大天狗「はや飲めとこそ」を誦い返す改変。

「はや飲めとこそ」で太鼓カシラ（ここから再び囃子打ち出シ）、以下、太鼓入り《立廻り》（序アリ）。はじめ、序に合わせて杖突き入れつつ足拍子を踏む。以下、大天狗は御息所を廻り舞台一巡、ただし御息所をことさら見ず、触れず、抽象的示威行動に終始。トメに囃子事の位進み、常座で御息所に向きサシコミヒラキ、拍子を三つ、左、右、左と踏む（最後一つ強く踏む）。最後の左拍子とともに御息所はガタリと安坐して両手を下ろす。続いて大天狗は《立廻り》前と同じく「はや●飲めとこそ」の●に当て杖を強く突く。袖は返さない。《立廻り》トメで太鼓打上

大天狗 はや飲めとこそ。「この一句は《立廻り》結尾に誦い込む」

御息所 叫ばんとすれば聲出です。

「大天狗は胸杖して立つたままずっと御息所を注視し続ける。小天狗二人、「身心たちまち」で羽團扇を大きく遣い片ユウケン二度」

小天狗 身心たちまち炎となつて。

御息所 五體さながら。

大天狗・小天狗 大紅蓮の。「御息所、手を下ろして居立つ」

復曲能（榎天狗）の演出について

田村良平（村上海）

□

地謡 【御息所立つ】 烟の中に立つつ居つ。【上着の唐織・縫箔の類を

《葵上》前シテの手順で脱ぐ準備】 烟の中に立つつ居つ苦しきはさらに盡きもせで。【大天狗「絶え絶えと」で御息所に立ち寄り、カセ杖を振り上げて杖頭で一つ打つと、御息所は上着を脱ぎ被いでガタリと下に居、安坐。大天狗は杖を取り直しつつ常座へ退り、御息所に向いたまま改めて一足踏ん込みざま「あらさて懲りの●姿や」の●に当てて杖を強く突き、そのまま御息所を強く見込む】 形も今は絶え絶えと炭籠の燠火となり給ふ。あらさて懲りの姿や。《打切》

※以下の「中ノリ地」のはじめに《今合返》を挿入、「ありつる愛宕の榎が原に」以下をヨワ吟に改め、トメの句を誦い返すよう改文した（節付・手付も改変）。それまで所作多く、詞章分量も少ないので、地謡は粘らぬながらもシツカリめに、いたずらに位の進み過ぎぬよう注意。

「大天狗は《打切》でその場にクツロギ、後見にカセ杖を渡し打杖に持ち替える」

「中ノリ地」

地謡 小天狗立ち寄りて。《今合返》【小天狗二人、《今合返》の間に小回りニつしながら御息所の左と右に分かれて勢い込んで正先まで出てサシコミ、ヒラキ、それぞれ巻キザシしつつ御息所に立ち寄り、強くヒラク】 立ち寄りて。【右側（向かって左側）の小天狗が羽團扇で荒々しく御息所を撫でる】 燠火となれる御身を撫づれば。【左側（向かって右側）の小天狗は御息所が引き被いでいる縫箔を両手で荒々しく剥ぎ取って、笛座の方へ大きく後ろ手に投げ捨てる（後見これを引く）】 また人の形となつて。【モギドウ姿の御息所、安坐のまま茫然と正面向こうを見る。

小天狗二人もとの位置に戻る」たまたま生ある姿となるぞ。

大天狗 大天狗立ち寄りて。【大天狗、御息所の右後ろ（向かつて左後ろ）に立ち寄る】

地謡 大天狗立ち寄りて。御髪を手にから巻いて。【大天狗、御息所の

肩に掛けるように左袖を大きく返し「二打ち二打ち」で打杖を二度大きく打ち、「打つよと見えしが」で四ツ拍子、「忽ち」でキツと見据えると、御息所はモロジオリ」黒鐵の笥を振り上げて。一打ち二打ち打つよと見えしがたちまち微塵に打ち碎けば。【小天狗は邪魔にならぬよう大天狗より先に、「忽ち木の葉の如く」と両ユウケンしつづつ橋掛りに行き、

それぞれ二ノ松と三ノ松に立ち左袖返し、御息所を見込む。大天狗はあとから橋掛りに流れ（横板で後見）に打杖を渡し、腰の羽團扇を抜かせて右手に持つ）嵐に散り行く木の葉の如く。ぱつと散ると見えつるが。

【大天狗、次の「虚空に」で一ノ松欄干際に出て左袖巻き上げて御息所を見込む】虚空に應ふる聲ありて。どつと笑ふと聞えしが。【虚空に應ふる】で小天狗二人は幕をサシ、大天狗は袖を直し向き直り、三人アユミを揃え幕に入る。急かす、むしろ悠然と入つて良い。続く「ありつる」からヨワ吟となり地謡の位がグツとシマルと（天狗が橋掛りに残つていても構わない）、御息所はモロジオリしていた両手を静かに解き、上体を起こす」ありつる愛宕の櫓が原に。影の如くに御息所。【影の如くに】（初句）に合わせて御息所は喪心の態で立ち上がり、呆然として向こう正面を見る。続く返シ句「影の如くに」で懐中より扇を取り出して広げ、大きくサシマワシて（右にトリながら）、そのまま蹠踵とアユム）影の如くに御息所は。夢幻となりにけり【扇を左手に取り常座（できれば一ノ松）で右ウケ下に居、枕扇してトメ。囃子は「残留」にしな

い】夢幻とぞなりにける。

以上